

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 『紅樓夢』後四十回における林黛玉の悪夢 |
| Author(s) | 船越, 達志 |
| Citation | 中國中世文學研究 , 63-64 : 318 - 331 |
| Issue Date | 2014-09-29 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051466 |
| Right | |
| Relation | |



『紅樓夢』後四十回における林黛玉の悪夢

船越達志

はじめに

『紅樓夢』第八十二回（続作部分）には、林黛玉がおどましい悪夢を見る場面がある。その悪夢の中で、賈宝玉は小刀で自らの胸を切りつけ、血まみれになりながら、「腹中の心が見つからない」と叫び、ついには白目をむいて倒れこんでしまう（以下、この悪夢を「黛玉の悪夢」と略称。宝玉が割腹して心を捜す場面を「宝玉の割腹」と略称）。黛玉の夢の中という設定ではあるが、異様な場面である。つとに一九二三年、俞平伯が後四十回に対して批評を下した際に「全く趣が無い」とこの場面に不快感を表しているし¹、また『紅樓夢』研究の大家・馮其庸氏もこの場面に對して「俗筆」、「悪筆」、「読むに耐えない」と繰り返し不快感を示している。兩大家の批評を待つまでも無く、優雅な『紅樓夢』の中でも、ひととき異彩を放つ、「グロテスク」とも言える描写である。これは、『紅樓夢』を一読した者なら誰もが感じる感想なのではないだろうか。では、後四十回の「続作者」³は、なぜわざわざこのような「悪筆」等とも評されるような夢を描

く必要があったのか。そこには何か意味があるのか。本稿ではこの点を中心に、続作者の創作態度を垣間見ようとするものである。

一 「黛玉の悪夢」の構造

本章ではまず「黛玉の悪夢」の展開を確認してみたい。

(1) 王熙鳳の「混鬧」

第八十二回、眠りに落ちた黛玉の夢の中に、まず王熙鳳が現われ、次のように言う。

又見鳳姐同邢夫人、王夫人、寶釵等都來笑道、「我們一來道喜、二來送行。」……鳳姐道「……（林姑爺）因托了賈雨村作媒、將你許了你繼母的什麼親戚。還說是續絃……」說得黛玉一身冷汗。黛玉……心上急著、硬說道「沒有的事。都是鳳姐姐混鬧。」……衆人不言語都冷笑而去。⁵

又、鳳姐と邢夫人、王夫人、宝釵らが皆やってきて笑いながら「私達は、一つにはお祝いを述べる為、

二つにはお見送りをする為に参りました。」と言います。……鳳姐は「……（林おじ様が）賈雨村さんに媒酌を頼んで、あなたの継母の親戚とかにあなたを嫁がせる約束をしたのよ。それも後妻ということですからね。……」と言います。この王熙鳳の話を聞いて黛玉は全身びっしょり冷や汗をかきます。黛玉は……心中あわてながら、鳳姐の言葉に逆らって「そんなことはないわ。みんな鳳姉さまのでたらめだわ。」と言いはります。……一同は何も言わずに皆冷笑して去ります。

夢で話題になっているのは黛玉と見ず知らずの相手との婚姻話であるが、それは黛玉にしてみれば、「宝玉との失恋」を意味する話でもある。まずこの点に注目したい。また「黛玉の悪夢」が、王熙鳳の言葉から始まっている点にも注目しておきたい。

(2) 賈母の冷淡な態度

窮地に陥った黛玉は、一同が立ち去った後、賈母にすることがを思いつく。

黛玉哭道「……只求老太太救我。」賈母道「不中用了。做了女人、終是要出嫁的。你孩子家不知道、在此地終非了局。」……黛玉道「我在這裡情願自己做個奴婢過活。自做自吃、也是願意。只求老太太作主。」老太

太總不言語。

黛玉は泣きながら「……大奥さま、お助けください。」と言いますが、賈母は「無駄だよ。女性に生まれたからには、最後にはお嫁にいかなければいけないものだよ。お前は子供だからわからないだろうがね、ここにはいつまでも身の振りがつかないのだよ。」と言うのでした。……黛玉は「私はこちらでは、使用人として日々を過ごすのでも構いません。自活でも望むところです。どうか大奥さま、お助けください。」と言いますが、大奥さまの方は全く何も言いません。

ところが賈母は黛玉に冷淡な態度を見せ、全く構ってくれない。甚だしくは、泣き叫んですがる黛玉に次のような態度まで見せる。

賈母道「鴛鴦、你來送姑娘出去歇歇。我到（倒）被他鬧乏了。」

賈母は「鴛鴦や、お嬢さん（黛玉）を送っていつて休ませてあげなさい。この子にうるさくつきまとわられて疲れてしまったわ。」と言います。

面倒くさく感じているかのような冷たい態度である。これらに見える「賈母の冷淡な態度」も、「黛玉の悪夢」の重要なポイントとして注目しておきたい。

(3) 賈宝玉の態度（「薄情」↓求婚↓絶望）
次に賈宝玉が黛玉の前に現われる。

便見賈玉站在面前、笑嘻嘻的說「妹妹大喜呀。」黛玉聽了這一句話、越發急了、也顧不得什麼了、把寶玉緊緊拉住、說「好、寶玉。我今日纔知道你是個無情無義的人了。」寶玉道「我怎麼無情無義。你既有了人家兒、俗們各自幹各自的了。」

すると宝玉が面前に立ち現れて、にこにこと笑いながら「黛玉さん、おめでどう。」と言います。黛玉はこの一言を聞くと、いよいよ苛立ち、何も構ってなどいられず、宝玉をきつく掴んで「そう、宝玉さん。

私は今日になってはじめてあなたが血も涙もない方だということが分かりましたわ。」と言います。宝玉は「私がどうして血も涙もない人間なのかな。あなたにはすでに結婚相手が決まったのだから、私達はそれぞれ自分の道を行くのみですよ。」と言うのでした。

なんと宝玉は、黛玉に婚姻のお祝いを述べるのである。宝玉は黛玉に甚だ「薄情」な態度を見せたのだ。しかし一方で、次のような発言もする。

寶玉道「你要不去、就在這裡住著。你原是許了我的、

所以你纔到我們這裡來。我待你是怎麼樣的、你也想想。」

宝玉は「あなたがもし行きたくないのなら、ここに居てください。あなたは元々私と結婚の約束があったので、こちらへいらしたのです。私があなたにどのようなに接してきたのか、ちよつと思ひ出してみてください。」と言います。

先ほどは黛玉に「薄情」な態度を見せたが、今度は逆に黛玉との婚姻に積極的な態度を見せる。そして「はじめに」で上述した、宝玉が割腹して心を捜す場面（「宝玉の割腹」）になる。以下、該当箇所掲げる。

寶玉道「我說叫你住下。你不信我的話、你就悄悄我的心。」說著、就拿著一把小刀子往胸口上一劃。只見鮮血直流。黛玉嚇得魂飛魄散、忙用手握著寶玉的心窩、哭道「你怎麼做出這個事來。你先來殺了我罷。」寶玉道「不怕。我拿我的心給你瞧。」還把手在劃開的地方兒亂抓（抓）。黛玉又顫又哭、又怕人撞破、抱住寶玉痛哭。寶玉道「不好了、我的心沒有了。活不得了。」說著、眼睛往上一番、咕咚就倒了。

宝玉は「私はあなたにここに居なさいと言っているのです。あなたが私を信じられないのなら、私の心をご覧ください。」と言いながら、小刀で胸をすうつと切り裂きます。鮮血がしきりに流れ出ます。黛

玉は魂が飛び出るかのようにびっくりしてしまい、あわてて宝玉の心臓の辺りを手で押さえて、泣きながら「どうしてあなたはこんなことをなさったの。まず私を殺してくださいな。」と言います。宝玉は「怖がることはありませんよ。私の心を取り出してお見せいたします。」と言い、先ほど切り裂いた箇所を手でやたらにかき回します。黛玉は又わなわなと震えながら泣く一方で、又、誰かが部屋の中に突然踏み込んできはしないかと心配し、宝玉をしつかり抱きしめて慟哭するのであります。宝玉は「だめだ、私の心は無くなつてしまつた。生きてはいけない。」と言いながら、目を上にくるりとむくと、ゴトンとひっくりかえつてしまいました。

以上の宝玉の態度をまとめると、次のようになる。①、黛玉に極めて「薄情」な態度を見せる（婚姻のお祝いを笑いながら述べる）↓②、黛玉に「求婚」とも取れる言動を見せる↓③、胸を切り裂き「心」を捜すが見つかられず、「絶望」の声をあげて倒れる。宝玉は以上の「薄情」↓求婚↓絶望」という三つの反応を黛玉に見せているのである。

以上が「黛玉の悪夢」の全過程である。確認してきた如く、この夢の構成要素として次の四点を挙げることができる。即ち、①話題になっている話は、黛玉にとつて「宝玉との失恋」を意味する話である点、②その話は

王熙鳳が口火を切つたものである点、③賈母が極めて冷淡な態度を見せる点、④賈宝玉が「薄情」↓求婚↓絶望」という三つの反応を黛玉に見せる点、である。以上を確認した上で、この悪夢の設定意義を考察していきたい。

二 「金玉縁」成就の過程

ここで注目すべきは、賈宝玉が薛宝釵を娶り「金玉縁」が成就する一連の流れ（以下「金玉縁成就」と略称）であるように思われる。逆に言えばこれは、第一章で確認した「黛玉の悪夢」の一番目の構成要素「宝玉と黛玉の失恋」をも意味している。以下、後四十回におけるその流れを確認していくことにする。

（一）王熙鳳の提案

まず、賈宝玉の全く与り知らない所で宝玉と宝釵の婚姻は話が進められてゆく。続作部分（後四十回）の開始後間もなく（第八十四回）、宝玉の縁談について話し合う賈母と奥方（邢夫人と王夫人）の会話に、王熙鳳は次のように口を挟む。

鳳姐笑道「不是我當著老祖宗太太們跟前說句大胆的話、現放著天配的姻縁、何用別處去找。」賈母笑問道「在那裡。」鳳姐道「二個寶玉、一個金鎖。老太太怎麼忘了。」

鳳姐は笑いながら「大奥さまや奥方様方の前で大胆

なことを申し上げるわけではありませんが、いま目の前に天が組み合わせた姻縁がありますのに、どうして他所をさがす必要がありましようか。」と言います。賈母が笑つて「どこにあるのだね。」と尋ねると、鳳姐は「一個の宝玉、一個の金鎖。大奥さまはどうしてお忘れになったのでしょうか。」と言います。

王熙鳳の言う「一個寶玉、一個金鎖」とは、宝玉と宝釵の姻縁を指す（所謂「金玉縁」）。賈母・王夫人はこうして宝釵を宝玉の婚姻相手に選ぶことになる。注目すべきは、この展開において「王熙鳳が口火を切った」、という点である。

しかし宝玉の最愛の女性は黛玉である。この点に関して、王熙鳳は更にな次のような提案をする。

鳳姐道「依我想、這件事只有一個掉包兒的法子。」賈母道「怎麼掉包兒。」鳳姐道「如今不管寶兄弟明白不明白、大家吵嚷起來。說是老爺做主、將林姑娘配了他了。瞧他的神情兒怎麼樣、要是他全不管、這個包兒也就不用掉了。若是他有些喜歡的意思、這事却要大費周折呢。」

鳳姐は言います。「私が思いますに、この件は『すり替えの法』でいくしかないと存じます。」賈母が「どういうすり替えかね。」と尋ねると、鳳姐は「今、宝玉さんがわかるうがわかるまいがとにかく、みんな

で次のように騒ぎたてるのです。つまり、旦那様のお指図により、林のお嬢様（林黛玉）を彼に嫁がせることになった、と。彼の顔色をうかがつて、もし彼が全く構わないようなら、この『すり替え』はする必要がありません。しかしもし彼にいくらかでも喜ぶ気持ちがあつたならば、この件は、大いに手間のかかることになるでしょう。」と言います。（第九十六回）

王熙鳳は、賈母や王夫人に「すり替えの法（掉包兒的法子）」を提案する。この計略も、やはり王熙鳳が言い出したものである点に注意しておきたい。賈母や王夫人らも皆それを黙認している。そして王熙鳳は、それを具体的に実行する。

且説次日鳳姐吃了早飯過來、便要試寶玉。走進裡間說道「寶兄弟大喜。老爺已擇了吉日、要給你娶親了。你喜歡不喜歡。」……鳳姐笑道「給你娶林妹妹過來、好不好。」

さて次の日、鳳姐は朝食を食べるとやつて来て、宝玉を試してみようとします。部屋の中へと入つてきて「宝玉さん、おめでとう。旦那様はすでに吉日を選んで、あなたにお嫁さんを娶つてくださるつもりですよ。嬉しいでしょう。」と言います。……鳳姐は笑つて「あなたに林のお嬢さんを娶つてくださると

のことですよ、どう。」と言います。(第九十七回)

王熙鳳はわざと「花嫁は黛玉だ」と告げて、宝玉を騙す。宝玉に黛玉と思わせておいたまま、結婚式当日にこっそり花嫁を宝釵に「すり替え」てしまおうという計略である。これが王熙鳳の所謂「すり替えの法」である。こうして、宝玉と宝釵の婚姻話は進行していく。

このように見てくると、宝玉宝釵の「金玉縁成就」は、王熙鳳の提案と彼女の計略を骨格として展開していることがわかる。賈母・王夫人らも皆それを黙認している。第一章で考察した「黛玉の悪夢」の二番目の構成要素は、「王熙鳳が口火を切る点」であったが、現実世界の展開もこれに呼応していると言えよう。また「黛玉の悪夢」中で黛玉が、「鳳姉さまのでたらめだわ(鳳姐姐混鬧)」、と叫んでいた点も、間接的に王熙鳳の「すり替えの法」を示唆しているようにも思える。

(2) 賈母の冷淡

また宝玉と宝釵の婚姻に際して、賈母の黛玉に対する態度も注目し値する。

賈母心裡只是納悶、因說「孩子們從小兒在一處兒頑、好些是有的。如今大了、懂的人事、就該要分別些、纔是做女孩兒的本分、我纔心裡疼他。若是他心裡有別的想頭、成了什麼人了呢。我可是白疼了他了。：

：

賈母は心中ただ訝しく思い、そこで「子供たちが小さい頃からいっしょに遊んでいたら、いくらか仲が良くなるのはありうることだよ。今や大きくなって、男女のことをわかるようになったら、それぞれ些か離れるようにすべきであって、そうであることが女の子の自分の本分を守ることであり、そうであってこそ私も心中あの子(黛玉)を可愛く思うというものです。もしあの子の心中に他の望み(宝玉への恋情を指す)があるというのなら、いったいどういう人間になつてしまふのかね。私は、全く無駄にあの子を可愛がつてきたことになつてしまふよ。……」と言います。

(第九十七回)

前八十回の賈母は、心から黛玉を可愛がつていた。しかしこの黛玉に対する発言は、極めて冷淡である。後四十回の賈母は、黛玉の恋情に対して否定的な感情を抱いていると言えるであろう。この後「金玉縁成就」まで、賈母の黛玉に対する冷淡な態度は続く。第一章で考察した「黛玉の悪夢」の三番目の構成要素は、「賈母の冷淡な態度」であったが、現実世界の展開もこれに呼応していると言えよう。

(3) 賈宝玉の態度

では、賈宝玉の態度はどうか。上述の如く、王熙鳳は

「すり替えの法」を実行し、婚姻相手は黛玉だ、と宝玉に告げる（第九十七回）。これを聞いた宝玉の反応が以下である。

這時寶玉雖因失玉昏憤、但只聽見娶了黛玉爲妻、眞乃是從古至今、天上人間、第一件暢心滿意的事了。

那身子頓覺健旺起來、祇不過不似從前那般靈透。所以鳳姐的妙計、百發百中。

この時宝玉は、玉（通靈宝玉）を失った事により頭がはつきりしなくなつてはおりましたが、黛玉を娶つて妻にするのだと聞くと、それは、古から今に至るまで、天上世界であろうと人間世界であろうと、眞に気持ち晴れやかになるような、最も満足な出来事だ、と考えます。身体の方も俄に健康になり力がみなぎつてきたように思えて、ただ以前のようには恰憫でない、という程度にすぎないのであります。ですから、鳳姐の妙計は、ずばり百發百中、ということになつたのです。

宝玉は第九十四回に「通靈宝玉」を紛失し、魂が抜けたかのような「病」にかかつていた。病により理性的な判断ができなくなつていたのである。その為、王熙鳳の「妙計」はずばりの中し（百發百中）、宝玉はすっかり「花嫁は黛玉だ」と信じ込んでしまう。宝玉は、王熙鳳の計略とは知らずに大喜びして結婚当日を迎えることになるの

である。

寶玉睜眼一看、好像寶釵、心中不信、自己一手持燈、一手擦眼一看、可不是寶釵麼。

宝玉は目を見開いて見てみると、どうやら宝釵のようですが、心中信じられず、自ら片方の手には灯火を持って、もう片方の手では眼をこすりながら見てみると、なんと宝釵ではありませんか。（第九十七回）

右は婚礼の儀式を済ませた直後に、相手が「宝釵」だと気づいた瞬間の宝玉の様子である。しかしもはや後の祭りである。宝玉は、こうして王熙鳳にまんまと騙されて、相手を黛玉と信じ込んだまま宝釵を娶ることになってしまうのである。

一方の黛玉は恨みを抱いたまま、この「同時刻」に死亡する。

三個人纔見了不及說話、剛擦着、猛聽黛玉直聲叫道「寶玉、寶玉、你好——」說到好字、便渾身冷汗、不作聲了。……只見黛玉兩眼一翻、嗚呼、「香魂一縷隨風散、愁緒三更入夢香。」

三人（探春、紫鵲、李紈）が顔を合わせても話をする間もなく、ちょうど（黛玉の）身体を拭いていると、突然黛玉が声をあげて「宝玉、宝玉、あなたよく（你好）——」と叫び、「好」の文字まで言うと、全

身に冷や汗をかき、声をなくしてしまいました。：
…黛玉の両方の眼はくるりとむいてしまい、ああ、
「香魂 一縷 風に隨つて散り、愁緒 三更 夢に
入りて香る。」(第九十八回)

以上見てきた「金玉縁成就」に対する宝玉の態度は、次のようにまとめることができよう。①、宝玉は宝釵と結婚するが、黛玉の側から見れば、これは極めて「薄情」な行為である。そして黛玉は宝玉のこの「薄情」な行為を恨み続けたまま他界する。②、しかし宝玉自身は、騙されているとは知らずに終始「花嫁は黛玉だ」とばかり信じ込んでいたのである。彼の心中に限って言えば、終始黛玉に対して「求婚」の気持ちを抱き続けていた、とも言えよう。③、しかし意に反して宝釵を娶ってしまった。気づいたのは全てが終った後のことである。黛玉との婚姻はここに「絶望」するのである。第一章で考察した「黛玉の悪夢」の四番目の構成要素は、「賈宝玉が『薄情↓求婚↓絶望』という三つの反応を黛玉に見せる点」であったが、現実世界の宝玉の態度もこれに呼応していると言えよう。

以上、現実世界における「金玉縁成就」(逆に言えば「宝玉と黛玉の失恋」)の展開を、「王熙鳳の提案」「賈母の冷淡な態度」「賈宝玉の態度」の三点から確認した。これはそのまま第一章で考察した「黛玉の悪夢」の構成要素に一致する。即ち、「黛玉の悪夢」は現実世界の予兆とし

て設定されていた事が窺われるのである。しかもそれは単に「予感させるもの」という次元のものではなく、具体的であり、「予知夢」とも言えるものである。

三 賈宝玉の悪夢

前章では「黛玉の悪夢」が、黛玉自身の未来を暗示する「予兆」として設定されたものであることを確認した。しかし「予兆であった」というだけなら、グロテスクな「宝玉の割腹」シーンが設けられている理由の説明として、まだ十分とは言えない。何か別の「恋愛の絶望」を示す描写でも良かったはずである。本章ではこの点を考えてみたい。続作者は、この「黛玉の悪夢」にもう一ひねり工夫を加え、その「予兆」としての意味を明確にする「仕掛け」を施しているように筆者には見受けられる。そして先のグロテスクな「宝玉の割腹」は、この「仕掛け」と密接に関係するように思われるのである。

(1) 「同時刻」の宝玉の悪夢

注目しうるのは、「黛玉の悪夢」の翌日における襲人の次の発言である。

襲人道「昨日晚上睡覺還是好好兒的、誰知半夜裡、一叠連聲的嚷起心疼來、嘴裡胡說白道、只說好像刀子割了去的似的。直鬧到打亮梆子以後纔好些了。你說唬人不唬人。今日不能上學、還要請大夫來吃藥呢。」

襲人は言います。「(宝玉様は)昨夜眠った時には別に何も問題はなかったのですが、なんと夜中にしきりに、心臓が痛い、と叫び出して、口では何やらでたらしめを言い散らして、刃物で切り裂かれたかのようだ、とばかりおっしゃっておいりましたわ。この騒ぎは夜明けの拍子木が打たれるまで続きました。びつくりするでしょう。今日は家塾に行くこともできず、お医者様を呼んで薬を飲んでいただくかねばなりませんの。」(第八十三回)

襲人は、賈宝玉もまた夢でうなされていたことを語っている。襲人の語る内容は、明らかに「黛玉の悪夢」における「宝玉の割腹」と呼応する。即ち、宝玉もまた、黛玉と全く「同時刻」に、同じ内容の夢を見ていたという設定がなされているのである。更には第八十五回、宝玉自身も黛玉に次のように言う描写がある。

黛玉也微笑道「……聽見說二哥哥身上也欠妥。好了麼。」寶玉道「可不是。我那日夜裡忽然心裡疼起來、這幾天剛好些就上學去了、也沒能過去看妹妹。」

黛玉も微笑して「……聞くところによりますと二番目お兄様(宝玉)も御身体の具合が悪かったとか。良くなられましたか。」と言うと、宝玉は「そうなの

ですよ。私はあの日の夜、突然心臓が痛み出して、ここ数日いくらか良くなったのですが、すぐ家塾に

行ったので、あなたの所には来ることができなかつたのですよ。」と言います。

この発言もやはり「黛玉の悪夢」と「同時刻」に胸が痛んだことを述べたものである。続作者は、宝玉も「黛玉の悪夢」と「同時刻」に同じ内容の夢を見て、胸を痛めたという点を繰り返して強調している、と言うことが出来るだろう。即ち、「宝玉の割腹」は、「黛玉と宝玉の二人が見た「悪夢」」として考えるべき設定だったのである。では、黛玉のみならず宝玉にもこの「悪夢」を設定した続作者の意図とは何なのか。

(2) 続作者が注目したもの―第五十七回―

ここで注目しうるのが、「原作者」曹雪芹による第五十七回である。この第五十七回、黛玉の侍女紫鵑は、「黛玉が故郷に帰る」との作り話を宝玉に告げる。宝玉の黛玉に対する愛情を試そうとしたのである。この話を真に受けた宝玉は、衝撃のあまり人事不省に陥る。前八回中、宝玉が黛玉への愛情を態度で表現した、最も印象的な場面である。一段落した後、宝玉は紫鵑に向かって次のように言う。

(寶玉)又說道「我只願這會子立刻我死了、把心進出來、你們瞧見了。然後連皮帶骨一概都化成一股灰、再化成一股煙、一陣大風吹得四面八方、都登時散了

這纔好。」一面説、一面又滾下泪來。

(宝玉は) また「私は、今直ちに死んでしまつて、
“心”を飛び出させて、あなた方(紫鵑と黛玉)に
見てもらいたい、とのみ願う。その後で皮も骨もみ
んなすべて一緒に一握りの灰と化し、更に一筋の煙
と化して、一陣の大風で四方八方へ吹き飛ばされ、
たちどころに皆散り散りになつてしまつたら良いの
に。」と言いながら、また涙を落とすのでした。

ここで宝玉は、自らの誠意(黛玉への愛情)を証明する
為に、「“心”を取り出して、黛玉や紫鵑に見てもらいた
い」と言っている。ここで言う“心”とは黛玉への誠意
(恋心)を指している。後四十回の“続作者”は、この
宝玉の発言に注目したのではないか。この宝玉の発言と
繋げて見た際、「悪夢」中に設けられた「宝玉の割腹」は、
「第五十七回の発言の如く自分は割腹してみたのに、黛
玉に見てもらいたはずの“心”が見つからなかつた」と
いう、「失恋」の意味合いを強く帯びてくる。「はじめ
に」で述べた「宝玉の割腹」の設定意図は、ここにあつ
たと筆者は考へるのである。

しかし、第五十七回における言葉は、宝玉が紫鵑に向
かつて発言したもので、その場に黛玉が居合わせたわけ
ではない。黛玉は聞いていないのである。宝玉の発言を
知らない黛玉が「宝玉の割腹」を夢見ても、上述の意味
は出てこない。そこで続作者は、宝玉も“同時刻”に同

じ内容の夢を見るといふ“仕掛け”を施した。こうする
ことによつて、「宝玉の割腹」は「失恋」の意味を明確に
帯びることになつたのである。

第九十回には、紫鵑が次のように発言する場面がある。

紫鵑道「……想來寶玉和姑娘必是姻緣。……他們兩
個竟是天配的了。再者、你想那一年我說了林姑娘要
回南去、把寶玉沒急死了、鬧的家翻宅亂。……」

紫鵑は言います。「……思うに宝玉さまとお嬢様(黛
玉)はきつと姻縁がおりなのよ。……あの方達お
二人は実は天が配置した一対なのだわ。それに、思
い出してよ、あの年に私が、林のお嬢様が南に帰る
と言つたら、宝玉さまは死ぬほどびつくりして、お
屋敷中を大騒ぎさせたじゃない。……」

紫鵑が言うのは、正に第五十七回の大騒動のことである。
更にこの件については、第九十六回において襲人も、

(襲人) 心想「……後來因爲紫鵑說了句頑話兒便哭
得死去活來。……」

(襲人は) 心中「……後には紫鵑が冗談を言つただ
けで(宝玉は) 生きるか死ぬかというほど泣いたも
のだわ。……」と思ひます。

と回想している。後四十回の“続作者”が、この第五十

七回の場面に、格別の注意を払っている事の証左と言えよう。そもそも「黛玉の悪夢」もこの第五十七回の騒動も、黛玉が故郷に帰るといふ話を発端としており、両者は構造自体類似している。

(3) 「失玉」の暗示

なお「悪夢」中における「宝玉の割腹」には、更に具体的な展開の暗示も被せられている。賈宝玉が通靈宝玉を紛失し、病になる一節（以下「失玉」と略称）である。上述の如く第九十四回、賈宝玉は通靈宝玉を紛失して病になる。その病によつて冷静な判断ができなくなつた宝玉は、王熙鳳に騙され、花嫁を黛玉と信じ込んだまま宝釵と結婚する（第九十七回）。これが、後四十回における「金玉縁成就」の基本的な流れである。即ち極言すれば、賈宝玉は通靈宝玉を紛失したことによつて宝釵と結婚する、という流れになつていたのである。この意味でも「宝玉の割腹」は「失恋」の予兆として機能していると言えるであろう。又、宝玉が悪夢に魘されて、夜中じゅう「心が痛い」と苦しむ様子は、「失玉」の後に彼が病になる展開にも符号している。宝玉の立場から見た際、「悪夢」中の「宝玉の割腹」には、「失玉」の展開が暗示されている点も事実であろう。なおこの「失玉」に関しては、更に深い続作者の設定意図があると筆者は考えるが、その点は稿を改めて論述することにする。

おわりに

(1) まとめ

本稿では、第八十二回における「黛玉の悪夢」が、黛玉自身の未来を暗示する「予兆」として設定されたものであることを論じた。とりわけその中でも印象的な「宝玉の割腹」の場面は、次のような発想で設定されたものであると考えた。

(I)、続作者は「黛玉と宝玉の失恋」（金玉縁成就）を暗示する「黛玉の悪夢」を第八十二回に設けようと考えた。

(II)、その際、続作者は、原作第五十七回における宝玉の「自らの心を取り出して黛玉に見てもらいたい」との発言（「原作者」曹雪芹による描写）に注目し、これを利用しようと考えた。

(III)、そこで続作者は、「黛玉の悪夢」中に「宝玉の割腹」の場面を設けようと考えた。しかし黛玉は第五十七回の発言を聞いていない為、そのままでは「宝玉の割腹」と第五十七回が明確に繋がらない。

(IV)、そこで続作者は、賈宝玉も「同時刻」に同じ夢を見たという設定を施すことを思いついた。第五十七回の発話者である宝玉にとつてその夢は、「第五十七回の発言の如く自分は割腹してみたのに、黛玉に見てもらいたくないはずの『心』が見つからなかった」という、「失恋」の暗示を明確に帯びること

になる。

(V)、「(IV)の措置」により、黛玉にとつても「宝玉の割腹」は「失恋」の暗示を明確に帯びることになつた。

以上のような発想の流れによつて、「宝玉の割腹」は設定されたと筆者は考へる。「黛玉と宝玉の失恋」(金玉縁成就)は、後四十回におけるハイライトとも言へる重要な場面である。続作者は、後四十回開始早々の第八十二回において、早くもその「予兆」としての「黛玉の悪夢」を設け、読者にその展開を予告したのである。黛玉と宝玉の失恋は、読者にとつてはあまり歓迎されない展開かもしれない。予兆としての「黛玉の悪夢」は、「悲恋」という展開に物語が向かう事を予め明示し、読者に心の準備をさせる、という効果があると言へよう。この一例からは、続作者が前八十回を熟読し、前後呼応させ、慎重に後四十回を創作していることが見て取れよう。

「黛玉の悪夢(とりわけ「宝玉の割腹」)」は一見、おぞましい描写ではあるが、それは続作者にとつて、「金玉縁成就」(黛玉と宝玉の失恋)という後四十回のハイライトを暗示する重要な「予兆」としての設定だったのである。「俗筆」、「悪筆」と一筆で否定されるような無意味な一節ではなく、力を込めて設定された場面だったのでと筆者は考へる。

(2) 同時刻

本稿では、「宝玉の割腹」が、黛玉と宝玉が「同時刻」に夢見たものとして設定されていることを指摘した。筆者は前稿において、後四十回において重要な場面を描く際に、続作者は「同時刻に何か起きる」という手法を好んで用いることを指摘した。前稿では、「林黛玉の死の直前に、司棋の死を描き、そこに烈女のイメージを重ねることによつて、間接的に烈女のイメージを黛玉に漂わせようとした」、という趣旨を論述したが、その際、「司棋死亡報告の場面」と「烈女を含む女性たちを講義する場面」が、「同時刻」に設定されることによつて、両者のイメージが重ね合わされていた(第九十二回)。また「黛玉の死」と「金玉縁成就」も「同時刻」に設定されていた(第九十七・九十八回)。即ち続作者は、「金玉縁成就」と「黛玉の死」という設定に対して、繰り返し「同時刻」の設定を施しているのである。「金玉縁成就」と「黛玉の死」は、「原作者」曹雪芹の原意であり(第五回の暗示等)、続作者も受け継がねばならない結末である。後四十回の続作者は、この展開に向けて用意周到に筆を運んでいる。本稿で確認した「予兆」としての「黛玉の悪夢」や、「同時刻」の設定は、正にその一端と言へよう。

(3) 失玉

なお本稿では、「宝玉の割腹」は、より具体的には「通靈宝玉紛失(失玉)」を暗示するという面がある事にも触れた。この「失玉」の設定に関しては、更に深い続作者

の設定意図があると筆者は考えるが、その点は稿を改めて論述することにする。

注

(1) 俞平伯「後四十回底批評」(一九二三)、俞平伯『紅樓夢辨上卷』上海亞東圖書館参照。原文は次の通り。「第八十二回寫黛玉做夢、第八十九回寫絕粒、都是毫無風趣的文字……」。

(2) 馮其庸重校評批『瓜飯樓重校評批《紅樓夢》』(二〇〇五)、遼寧人民出版社 第八十二回眉批(下卷一四六二頁)参照。原文は次の通り。「俗筆、惡筆、令人不堪卒讀、呂啓祥云：『這樣鮮血淋漓、剖心挖肝的畫面、實在不能給人以美感、用來表現賈寶玉、林黛玉的愛情、實在太不協調。』」

(3) 後四十回の作者は、高鶚(高蘭墅)とされることが多い。しかし高鶚以前に後四十回の作者を別に想定する考えもある。本稿では後四十回の作者を「統作者」と称することとどめ、その「統作者」が何者なのか、については立ち入らない。

(4) 『紅樓夢』における夢に関する研究には、日本の論考に、竹村則行「西廂記、還魂記と紅樓夢をめぐる夢の發展―現実の中の夢から夢の中の現実へ―」(一九八六、『日本中国学会報』第三十八集)、楊冬静「『紅樓夢』の夢についての一考察」(一九九五、『立命館言語文化研究』七一)がある。しかし、いずれも筆者の提起する問題に対して分析を行っていないわけではない。

(5) 以下、本稿での引用は『程甲本紅樓夢』(二〇〇一、北京

大學圖書館出版社)による。

(6) 前八十回ですでに買母も王夫人も、薛宝釵に好意を寄せている。ただし、後四十回の「宝玉の婚姻相手を宝釵に決める」展開において、まず王熙鳳が口火を切った、という点の本稿では重視したい。

(7) 黛玉のみならず、黛玉付の侍女紫鵲や雪雁も、宝玉の薄情な態度に不満を覚えている場面が描かれている(第九十七回)。

(8) (注4) 前掲竹村氏論文にも「……第八二回では、林黛玉が賈宝玉の悪夢を見る。この場面は二人の木石縁の破綻を想像させる……」とあるが、それ以上の言及は無く考察がなされているわけではない。

(9) 沈治鈞評批『新批校注紅樓夢』(二〇一三、商務印書館。一四九九頁)の第八十二回評にも、「此節寶玉失心、激射後文失玉瘋痴」との指摘がある。但し考察がなされているわけではない。また黛玉の悪夢と賈宝玉の失玉を対置して論じたものに、顧紹炯「怡紅失玉和瀟湘驚夢―談《紅樓夢》後四十回中的深層心理描寫」(一九八五、貴州省紅樓夢研究學會『紅樓夢人物論―一九八五年全國紅學會學術討論會論文選』)がある。但し本稿とは論点が異なっている。

(10) 俞平伯「高鶚續書底依據」(一九五二、俞平伯『紅樓夢研究』棠棣出版社)や村松暎「『紅樓夢』後四十回の評価」(一九五八、『慶応義塾創立百年記念論文集』)等にも、「失玉」が原因となって「金玉縁」が成就する、という統作者の手法が指摘されている。また裴効維校注『紅樓夢全解本』(二〇

- 〇一、中央編譯出版社「三二三頁」にも、「……因爲買賣玉
只有在矢玉糊塗的情況下才可能薛寶釵成親」との指摘がある。
- (11) 前八十回内においても宝玉と黛玉の悲恋は暗示されてい
るが、ここでは「明確」にそれを予兆として読者に提示する
ことに、続作者の意図があったと思われる。
- (12) 拙稿「巧姐の「忽大忽小」と林黛玉の死―『紅樓夢』後
四十回の構想考―」(二〇〇九、『日本中国学会報』第六十一
集) 参照。